

森岡正博全集第一六巻

引き裂かれた生命

画面閲覧用PDF

はじめに〜第三章

* 画面で閲覧するのに最適のレイアウトです。

* 無料でごらんになれます。

* パソコンのハードディスクに保存すれば、電話線を切ってから、ゆっくり画面でお読みいただけます。そのほうが快適に読めます。

* 印刷や、テキストの抜き出しはできません。

* 印刷したり、ページ番号を確認するためには、目次に戻って、印刷用PDFを入手してください。少ない枚数で書籍のように美しく印刷できます。

目次に戻る

森岡正博全集に戻る

はじめに

地球上に生命として生きる人間は、三つの本性によって突き動かされているのではないか。私はそのようなアイデアで、本連載を書いた。三つの本性とは、「連なりの本性」「自己利益の本性」「ささえの本性」である。季刊『仏教』誌に連載したものだが、その後、あえて単行本にすることを避けてきた。しかし、ここに、連載当時のままの文章をまとめて刊行することにする。ここで述べた論点は、生命論、自然保護論、文明論を考えてゆくときに、避けては通れないものであるように私には思われる。

第一章

私がいま生きているとはどういうことか。そして私が死んでゆくとはどういうことか。この問いが、私のすべての思索の根底にある。「生とは何か、死とは何か」を考え抜いていくこと。そして私がこの世で生きる意味、すなわち「生命の意味」とは何かを考え続けていくこと。その思索は、現代文明と科学技術のもとにおいて、私がどのように生きてゆけばいいのかを考えることにながってゆく。

そのような思索と実践のすべてのプロセス、すべての流れのことを私は「生命学」という名前で呼んでいる。生命学ということばは、拙著『生命学への招待』(勁草書房 一九八八年)においてはじめて導入された。その後、七年を経て、少しずつその具体的な意味内容が固まりつつある。本連載では、私がいま考えている生命学の一部を紹介し、この問題についてさらに思索を進めていくためのスナップとしたい。

生命の意味とは何か。そして、いまここで私はどのように生き

てゆけばよいのか。それらの問いに答えるためには、まず、生命として生きる私が、この生命世界の中で、どのような形で生きているのかを把握しなければならぬ。

私はこの世界で生命として生きている。それはすなわち、私が何者かから産み落とされ、人々の手によって育まれ、成長し、性行為によって子どもを産み、そしてやがて老いて、最後に死ぬということの意味している。「私」とは、成長と老衰と死を宿命づけられた主体である。「私」とは、近代科学や近代哲学が想定するような、世界の外部に点として立つ不変の認識主体ではない。そうではなくて、「私」とは、成長や学習や病いや老衰などによって、つねにみずからを変容させ続けていくような変容主体なのだ。

私が生命として生きているということは、二つのことを意味している。まず、私自身の生命はある時点に始まって、ある時点で終わるということである。私の生は有限であるということだ。私は、有限の時空を、この世において生き切るしかない。しかし生命には、もうひとつの側面がある。すべての生命は、他の生命から産み落とされる。私の生命は私の両親から生まれた。私の子どもは、私と配偶者から生まれた。こうやって、個々の生命は、生命が他の生命を次々と生み出して自らは消滅してゆくとい

う、「生命の生成と消滅の連鎖」の中に埋め込まれている。(自分の子どもをもたない人も、この連鎖に組み込まれている)。

生命には、このような二つの側面がある。すなわち、一方においては、個々の生命はこの世の有限の時空をしか生きることができない。しかし、他方においては、それは、個々の生死を超えた「生命の生成と消滅の連鎖」の中に、必然的に組み込まれているのである。私は、生命のこのような姿のことを、「いのち」ということばで呼んできた(拙論 *The Concept of Inochi, Japan Review No.2* (1991):83-115)。

私がいまここで生きているということ、それは、このような通時的な生命の生成と消滅の連鎖のただ中において、私という有限な生命がいまここに存在させられたということでもある。

ところで、生命にはさらにもうひとつの姿がある。それは、私という生命が、いま地球上に存在する様々な生命の網の目にさええられて生きているという姿である。

私がいまここで生きているのは、私の日々の食料となって死んでゆく植物や動物がいるからだ。私が生きていけるのは、植物が光合成によって、酸素を生産してくれるおかげだ。食物連鎖や、異種間の共生関係などによって、私の生命はこの地球上で維持されている。この意味で、私の生命は、地球大に広がった生命の相

互依存のネットワークにささえられて、はじめて存在していると言える。

だとすれば、こういうことだ。

いまここで生きている私の生命について考えることは、私の生命を包み込んであるかな過去から現在、そして未来へと続く「生命の生成と消滅の連鎖」について考えることであり、同時に、私の生命をささえてくれているこの地球上の生命の相互依存のネットワークについて考えることである。それは、そのような通時的・共時的な生命の連なりの中において、私という有限な時空を背負った生命が生まれでてきたことの意味について、考えることである。

生命学とは、このような広がりのもとにおいて、いまここで生きる私とは何かをとことんまで考えることであり、私の生き方について考えることであり、そしてその私がよりよき生と死を生きてゆくことである。そして、そのような思索のプロセスとのかかわりにおいて、生命倫理や、エコロジーや、救いと癒しや、フェミニズムなどについて考えを深め、それらに向かって主体的にかわっていくことである。

私は生命学というアプローチによって、現代における生と死の意味、人間の欲望とテクノロジー、いのちの哲学、自然界における共生と殺戮の意味、将来の科学技術の質的転換の可能性などの問題を追求してゆこうと考えている。その第一歩として、本連載では、生命学の様々なアプローチの中から、「人間の生命の本性」という切り口にこだわって、そこから何が見えてくるのかを徹底的に追いつめていきたい。「人間の生命の本性」という窓を通して見えてくる生命の姿を、しっかりと浮かび上がらせたい。先取りしていえば、そこから見えてくるのは、「引き裂かれた生命の姿」である。人間の生命の、引き裂かれた本性の葛藤から、現代の生命倫理やエコロジーの難問は立ち上がってきているのだ。

「人間の生命の本性」の考察に入るための準備として、まず、現代の自然保護と社会福祉の現場に目を転じてみたい。そこで我々はひとつの原理的な難問に直面する。いったい何のために我々は自然保護をするのか、社会福祉をするのかという問題だ。実は、この難問の背後に、「人間の生命の本性」の姿が、見えかくれしているのである。

では、まず、自然保護の場面から考えてみよう。

現代の産業文明は、自然環境を猛烈に破壊してきた。だから、失われゆく自然を保護してゆかなければ人類に未来はない。こういう言説が、近年のエコロジーブームによって世間に溢れている。

失われゆく自然を保護しなければならないというとき、その背後には、まったく異なる二つの思想が潜んでいる。環境倫理学は、この二つの思想のことを、「保全」の思想と「保存」の思想というふうに呼んできた。

この二つの思想の違いは、「自然環境を守らなければいけない」と言うが、ではそもそもどうして自然環境を守らなければならないのですか？ その理由は何ですか？」と問いつめることで明らかになる。

まず「保全」の思想は、その問いかけに対して次のように答える。自然環境をこのまま破壊してゆくと、ゆくゆくは人類がたいへんな危機に遭遇することになる。自然環境を破壊から守らないと、将来世代の人間たちがとんでもない悪環境で生活しなければならなくなるし、ひよっとしたら人類は滅亡するかもしれない。だから、自然環境を保護しなければならないのだ。

保全派のこの答えは、要するに、人間が危機に陥らないようにするために自然環境を守るのだという考え方である。つまり人間

を守るために、自然環境を保護するというわけである。人間のために自然保護をする。つきつめれば、人間中心主義の自然保護だと言える。

これに対して、「保存」の思想は別の答え方をする。自然環境を保護するのは、なにもそれが人間のためになるからではない。何千年もかけて作り上げられてきた原生林や、生態系の豊かな生命のネットワークは、それ自体たいへん貴重な価値をもっている。人間は、それらの尊く豊かな自然を、自分たちの生活のための道具として処分してはならない。我々は、豊かな自然環境のもつすばらしさを尊重し、それになるべく手をつけない形で保護してゆかなければならない。

保存派のこの答えは、要するに、自然環境はそれ自体尊く貴重な価値をもっているから、それを保護しなければならないという考え方である。つまり人間にメリットがあるかどうかということと切り離して、自然環境を保護しなければならないと考えるのである。自然のために自然保護をする。つきつめれば、人間非中心主義をめざした自然保護だと言える。

この二つの思想は、ふつうは我々の内部に共存しているので、どちらの考え方も論理としては理解可能である。人に自然保護の大切さを説くときでも、この二つのレトリックを行ったり来たり

しながらしゃべったりする。

しかし、この二つの思想は、その根底では、お互いに全く対立する本質をもっているのだ。たとえば、原生林をどういう形で残してゆくかという点で、この二つの思想は対立をはじめめる。保全の思想は、原生林に人間がしつかりと手を入れ、そうすることで美しい景観を維持し、間伐材を回収して林業資源とし、林道を付けてリクリエーションの基盤とし、地域の住民の生活をささえる事業に結びつけようとする。そこに住む人間が快適に暮らせるように原生林を管理しきってゆくこと、これが保全の思想が考える自然保護の姿である。

ところが、保存の思想はそうは考えない。原生林はそこに住む人間たちの小さな思惑を超えて、それ自体としての尊さと価値をもっている。だから、それに人間が手をつけることは最後まで行なうべきではない。たとえ人間が少々不便な暮らしを強いられるとしても、原生林をそのままサンクチュアリ（聖域）にして手つかずで守りきり、それを観光化しようなどという悪巧みにひっつからずに、自然のふところに包まれて質素に生きること。これが、保存の思想が考える自然保護の姿である。

こうやって、管理か、手つかずの保存かというおなじみの対立が表面化する。そして、両派とも、自分たちの考え方こそが「真

の「自然保護なのだ」と主張するのである。これは、長良川河口堰でも出てきたし、アメリカの古典的なヘッチー・ヘッチー論争でも出てきた対立図式である。

この対立は、考えれば考えるほど根深いものであることが分かる。この対立が生じてくる背景には、我々人間が生命として背負っている二つの本性のあいだの矛盾と葛藤があるのだ。

さて、これとよく似た対立図式が、社会福祉の場面でも現われてくる。

この対立は、いま紹介した対立とはまた別種のものである。しかしその矛盾のあらわれ方はよく似ている。

日本社会は、これから超高齢化社会へと突入してゆく。二〇二五年には、国民の四人にひとりが六五歳以上の高齢者となる。医療技術の進歩によって、逆説的だが、死を目前に控えて心身ともに弱っている末期患者や、身体障害者の数も増えると予想される。

日本社会が二一世紀にも円滑に機能してゆくためには、老いや障害や病気をもった弱い人々の生と暮らしを、健康で余力のある人間たちが十分にサポートしてゆけるような社会システムを作り上げなければならない。そういう形の福祉社会へと変貌しないかぎり、日本には未来はない。こういう切実な予感を抱いている人は多いと思う。

そういう助け合い、ささえあいの社会が理想であることに異議を唱える人は少ないだろう。しかし、人間はきわめて利己的な動物である。そんな利他的なシステムがほんとうに組めるのか。そういう疑いがすぐにわいてくる。そこを突き詰めてゆくと、次の問いがでてくる。「そもそもどうして人は他人を助けたり、ささえたりしようとするのか？ その動機は何か？」社会福祉の思想を掘り下げるためには、ここを一回きちんと詰めておかねばならない。そして、この問いに対する答えの中にもまた、相対立する二種類の思想が混在しているのである。

まず、利己主義の援助思想がある。人が困っている他人を助けるのは、いまその他人を助けておくと、今度自分が困ったときにその他人に助けてもらえるのではないかと計算するからだ。これがもう少し洗練されると、次のようになる。困っている他人を助けるのは、なにもその人からの見返りを直接に期待するからではない。そうではなくて、困った他人を助けるという慣習やルールを社会の中に作り上げておけば、将来自分が困ったときに、誰か別の他人によって助けられるからである。老人福祉がなぜ必要かを説明するとき、このレトリックが使われることがある。「老人が幸せに暮らせる社会をいまから苦勞して作っておかないと、あなたが将来老人になったときに悲惨な目にあいますよ」という

論法である。いわば「情けは人のためならず」というわけだ。自分が一生暮らすこともない南の諸国の社会福祉のためには援助をしないが、この自分が老後を過ごさなければならぬ日本社会福祉のためには、金も知恵も出さずにはおれないという心情があるとするれば、そこにはこの利己主義の援助思想がある。生命保険や損害保険を実際にささえている思想も、これであろう。あるいは、他人を助けるといふ行為が、援助者本人の自己実現・生の充実のための手段になっている場合や、援助者本人の自己確認の儀式となつている場合などもまた、この利己主義の援助思想だと言える。

ところが、これとは逆の思想がある。それは利他主義の援助思想である。困つたり苦しんだりして、助けを求めている他人がいたときに、それを見た我々はその他人の苦しみを少しでもやわらげてあげたいと思つて援助行動を行なうことがある。阪神大震災でも、若者を中心とした数多くのボランティアが集結したが、その動機は「いま手助けしておけば、将来自分が災害にあつたときに助けてもらえる」というものではなく、悲惨な環境下で困っている人々を見て、いてもたつてもいられなくなつて援助行動に走つたのにちがいない。道端で小さな子どもがしゃがみ込んで苦しんでいるときに、思わず声をかけて心配してしまうのも、我々の

中に利他主義の援助思想が潜んでいるからであろう。いわば孟子の言う「惻隱の情」に発する援助思想なのだ。

この二つの援助思想は、ふつう我々の内部に共存している。だから、社会福祉ということを考えるときに、どちらのルートで考えることもできる。しかし、この二つの思想が実は根本的に異なつた原理で動いているという点は、注意しておくべきである。たとえば、現在も将来もほとんど自分への直接の見返りが無いような援助を、それでも行なうべきかどうかという状況が生じたときに、この二つの思想は対立する。利己主義の援助思想は次のように言うだろう。まったく見返りのない援助行動とは、要するに相手の要求に応じて単なる相手の手足として黙々と働くことにすぎず、そういう援助は一時の感情高揚状態では成立するかもしれないが、持続的な社会福祉のシステム作りにとってはむしろマイナス要因となる。それに、そういう一方的な犠牲精神だけの援助は、逆に相手の自尊心と自立を損なう結果となつたり、援助する側のバーンアウト（燃え尽き）を導く危険性がある。

これに対して、利他主義の援助思想は反論するだろう。我々が困っている他人を目の当たりにしたときに感じる感情、つまり「この人をなんとか窮地から救ってあげたい」「この人の苦しみをなんとか分かち合ってあげたい」という共感・共苦の感情があつて

こそ、我々は援助行動へと駆り立てられるのである。そういう共感・共苦の精神の前では、「それが自分のためになるのかどうか」という配慮など小さなものにすぎない。たとえそれが自分のためにならなくても、我々是可以る限りそのような苦境におかれた他人を援助してゆくべきである。この精神に基礎づけられてはじめて福祉社会は建設できるのだ。

3 生命の三つの本性

人間と自然のあいだで生じる思想の対立と、人間社会の内部で生じる思想の対立を見てきた。もちろん、理念型を抽出してその特徴を調べるといふ手法を取ったので、図式的になりすぎたかもしれない。現場での問題設定は、もつと複雑で微妙であることはよく承知している。しかしながら、私がここで抽出した思想の対立は、やはり現代文明と人間の間関係を見ていく上で、重要な洞察を提供してくれると思うのである。

ここに浮かび上がるのは、引き裂かれた人間の生命の姿である。人間は、対自然と、対人間の二つの場面において、同型の構造

で二重に引き裂かれている。すなわち、対自然では、「人間のために自然を守るのか、それとも自然のために自然を守るのか」という形で引き裂かれ、対人間では、「自分のために他人を助けるのか、それとも他人のために他人を助けるのか」という形で引き裂かれているのだ。そしてそこから見えてくるのは、現代文明の中でもだえている人間の生命の本性と、欲望と、愛の姿である。

生命と自然にかんする思想がこのような対立・矛盾を抱え込んでしまうのは、ほかならぬ人間の生命に内在しているいくつかの「生命の本性」が、人間存在のもっとも根底的な場所に対立・矛盾しているからだというふうに私は考えている。

私は人間の生命の本性として、

- (1) 連なりの本性
- (2) 自己利益の本性
- (3) ささえの本性

の三つを考える。「連なりの本性」とは、自分の生命と外なる自然を一体化させたいという本性である。「自己利益の本性」とは、自分の利益のためには他の生命を犠牲にしてもかまわないとする本性である。「ささえの本性」とは、苦しんでいる他人を助けて

あげたいという本性である。それらは、人間のもつとも深いところに内在していて、我々はそこから逃れきることはできない。私の内面世界をじつと凝視してみよう。生命として生きる私の中には、この三つの本性が、まぎれもなく存在している。それら三つの本性は、それぞれ異なった重さで、私の内部にうごめいている。私の中にあるこの三つ本性の存在を実感し、その姿を浮き彫りにすることからはじめなければならない。

この三つの本性のうち、「自己利益の本性」と「連なりの本性」の対立が思想レベルにまで浮上したときに、それは「保全」の思想と「保存」の思想の対立となって表面化する。さらに「自己利益の本性」と「ささえの本性」の対立が思想レベルにまで浮上したときに、それは利己主義の援助思想と利他主義の援助思想の対立となって表面化する。これらの対立は、学問レベルで理論的に調停しようとしても、不可能である（だから環境倫理学で行なわれてきたこの種の調停の試みはすべて不毛である）。なぜなら、それは人間がこの地球上で生命体として集団生活を行なってきた歴史が、我々のもつとも奥深い場所に刻印したものである。このような思想の対立は、人間の生命の三つの本性の姿をはっきりさせることによって、よりくつきりと見えてくるはずである。

生命としてこの地球上に生きている人間は、その生命の奥底に、

三つの異なる本性を刻み込まれている。人間は生命体である以上、これら三つの本性から逃れ出るわけにはいかない。我々の奥底にそのような本性が潜んでいるという見方を取るときに、そこからどのような人間観や生命観が導かれてくるのかを、順序を追って考えてゆきたい。

この論文で私が展開する議論は、従って、我々自身の生命をどのような枠組みを用いて把握してゆけばいいのかという、一種の枠組み論である。「人間は生命の三つの本性によつて根本的に縛られている」という枠組みで世界を眺め取るときに、この生命世界はどのような姿をとつてあらわれてくるのか。そのような見方は、現代の諸問題の議論にどのような寄与をするのか。それを確かめてゆきたいのだ。

また、ここでの議論は、人間の生命の本性にかかわるものである。もしそれがほんとうに人間の本性として刻まれているのなら、それらはすべてほかならぬ私自身の内面の奥深くで発見できるはずである。ふだんは忘れ去られている内面の深層へと降りる旅。私はこの論文でそれを遂行する。

人間について考えるときに、その「本性」にまで遡って考えることは、哲学的思索のひとつの伝統であるとも言える。古くはD・ヒュームの『人間本性論』がそうであったし、最近ではE・O

・ウイルソンの『人間の本性について』がある。本論文は、ヒュームやウイルソンらの影響を受けながらも、彼らが開くことのできなかつたあらたな次元へと思索の扉を開いてゆこうとする試みである。

さて、人間の生命の三つの本性について語るためには、まず「人間の生命の本性」とは一体何なのかを定義しておかなければならない。私はとりあえず、つぎのように定義しておきたい。

人間の生命の本性

生命としての人間の奥底に深く刻み込まれていて、人間の思考様式や行動パターンの基本を決定する宿命のようなもの。それらを無視したり軽視した判断や行動を人間が続けたときには、あとでこの本性に復讐される。

人間の生命の本性は、人間の身体やところがもっている様々な傾向性をみちびく。人間が抱く多くの思想は、この人間の生命の本性を背景にもっている。この人間の生命の本性が、人間という生物体のどの場所に刻み込まれているのかについては、言及しないことにしたい。というのも、分子生物学者や社会生物学者ならば、それは遺伝子のことだと言うであろうが、人間の行動や思考

パターンのすべてを遺伝子が決定しているという証拠は、まだ上がっていない。

ここでもうひとつ注意を促しておきたいことがある。それは、いま議論しているのは、人間の 生命の 本性だということである。つまり、それは、人間がもっているであろう様々な本性のうち、人間が「生命体」として生きていることに直接由来する本性のことなのである。具体的に言えば、「遊びを追求してしまうこと」は、人間の根本的な本性のひとつにちがいない。しかしそれは、人間がこの地球上で生まれ、成長し、他の生物を食べ、共同体を作り、子どもを生み、老いて、死んでゆくという、人間の生命体としてのあり方それ自体に直接由来する本性ではない。

それでは、人間の生命の三つの本性のうち、まず「連なりの本性」と「自己利益の本性」の二つを対照させながら、話を進めてゆこう。それが終わったあとで、今度は「自己利益の本性」と「さえの本性」の二つを対照させながら、話を進めてゆく。そのあとで、これら三つの本性の相互関係を、さらに詳しく考えてゆきたい。

では、まず、「連なりの本性」と「自己利益の本性」について考えたい。

「連なりの本性」は、人間の生命が生命圏のネットワークとながっているという「連なりの事実」から導かれる。「自己利益の本性」は、人間が自分たちの利益を最優先させて生き延びてきたという「自己利益の事実」から導かれる。

連なりの事実

連なりの本性

自己利益の事実

自己利益の本性

だから、若干回り道にはなるが、「連なりの事実」「自己利益の事実」という、二種類の事実について最初に述べておきたい。そのあとで、二つの本性の話に入ることにする。

現在の生物学の大枠が正しいとすれば、人間は約四〇億年の生物進化の果てにあらわれた、ひとつの生物種である。

約四六億年前に地球が誕生した。そして、約四〇億年前に、RNAとDNAをもった原細菌が出現する。その細菌は、環境の変化に耐え、子孫をのこして増殖する能力をもっている。この原細

菌から様々な微生物が分化し、太古の海に繁殖して、地球上に広がってゆく。

約二〇億年前、光合成を行なう細菌が出現し、それまではほとんど存在しなかった大気中の酸素を、現在の濃度である二一％にまで押し上げる。これによつて、かなり多くの細菌が絶滅し、酸素に適応できた細菌のみが生きのびた。生物が経験した最大規模の環境破壊だと言われている。

その後、真核生物が誕生し、海は様々な生物で満たされるようになる。約四億年前、脊椎動物があらわれ、植物が地上に進出し、動物も地上に上がる。海は魚であふれる。約二億年前には哺乳類が出現する。人間の原型（ヒト科）が出現したのが数百万年前。現在の人間（ヒト種）が成立するのが、数万年〜十数万年前である。

そうして、いま我々は、地球上全域に分布して生活している。こうやって生物の進化を見てみると、次のことがわかる。つまり、いま存在している生物は、すべて、太古の海に出現した古代生物のネットワークから進化してきたものである。海の中で、お互いに影響を与えあい、遺伝子を交換しあい、競争したり、殺戮したり、共生したりしながら、徐々に分化し発展することによつて、現在の生物群が作り上げられてきたのだ。つまり、太古の海

に出現した生命の母体のネットワークが、その後地上にも拡大し、現在の地球生命圏を形成するにいたったのである。ちょうど、小さな風船がふくらんで、巨大なアドバルーンになるように、太古の海の生命の母体が分裂し膨張して、現在の地球生命圏になったのだ。

すべての生物は、生命の母体を構成する一員でしかない。

人間もまた、そういう「生命の母体」から産み落とされた、ひとつの生物種にほかならない（「生命の母体」ということばを使うと、女性に母役割を押しつけ、女性を自然に等値してきた家父長制のイデオロギーの残滓であると批判されるだろう。しかし私にはあえて自覚的に、このことばを使いたい。なぜなら、男性による構造的な女性支配が終わるとき、母性は死に絶えるのではなく、それは女性の中にも男性の中にもひとしくよみがえるところからである。内なる自然は、女性だけの独占物ではない。男性もまたそれをもっているのだ。）

人間は、両親の卵と精子の結合によって誕生する。そして、自然界から食物や酸素などを取り入れて成長し、子供を産み、死んでゆく。死んだ人間の身体は、火葬されて骨と灰と微小粒子となり、ふたたび自然界へとかえされてゆく。それらは微生物の食料となり、植物へと吸収されてゆく。このように、人間は、生命の

母体にささえられて成長し、生命の母体のなかへと死んでゆくのである。

人間は、生命圏のネットワークにささえられることなしには、一瞬たりとも生きてゆけない。生命圏は、複雑な「食物連鎖」の網の目を作り上げている。人間が生きてゆくためには、他の生物を殺して、それを食べなければならぬ。他の生物を殺して食べることに。これは、人間が生命圏のなかで生きのびてゆくための、前提条件である。病気になったり、死んだりすれば、人間も細菌に食べられる。

また、他の生物との「共生」関係がないと、人間は生きてゆけない。たとえば、植物が光合成をおこなって酸素を補給してくれなければ、人間は呼吸することができない。植物は、動物の出す二酸化炭素のおかげで、光合成をおこなっている。このような共生関係にささえられて、多くの生物は生活している。

すべての生物が、同じ生命の母体から分化してきたことは、次のような事実を見ても分かる。

人間は、生まれ、成長し、大人になって人生の充実期を過ごし、老いて、死んでゆく。その過程で、子供を産むことも多い。このような誕生 成長 出産 老衰 死のパターンは、人間以外の多くの生物に見られる。そういうパターンを繰り返しながら、生命

の連続性が保たれてゆく。人間は、他の生物と、そういう生命の変容パターンを共有している。これは、人間をも含めたすべての生物が、同じひとつの生命の母体から分化してきたからである。私たちは、発芽する植物を見て、そこに生命の成長のエネルギーを感じとったり、老いてゆく動物を見て、生命のむなしさを実感したりする。そんなことができるのは、我々が、そういう生命の変容パターンを動物や植物と共有しているからなのだ。

古代の生物は、約三〇億年以上も海の中で過ごしていた。海的环境中に適應しながら、生物は自らの身体を作りあげて、発展していった。植物や動物が地上に上がるとき、彼らは海的环境を、自らの身体の中に封じこめた。植物や動物の身体の大部分は水である。そして、人間の身体の血液中の塩分の濃度と、海水の塩分の濃度はほとんど同じである。涙や血液が塩辛いのは、そのせいだ。人間の受精は、この海の水にも似た体液の中でおこなわれる。そして、子宮の中の水に包まれて胎児は育つ。女性の生理のリズムは、海の満ち引きの周期と一致する。それは、月が地球を回る周期と対応している。男性の性衝動にも、なんらかの周期がある。我々のからだは、太古の海的环境と、天体の運行の周期とを内在している。

我々は外なる自然と同じものを、実際に、身体の中におさめ

ているのだ。外なる自然のリズムと変容のプロセスは、我々の身体の内にあるものと呼応している。自然という通路をとおって、身体の外なる世界と、身体の内なる世界は通底しているのである。これを「外なる自然」と「内なる自然」と言ってもいい。

このように、生物としての人間は、生命の母体から生まれて、そこへと死んでゆく存在である。そして、食物連鎖と共生関係によつてささえられて生きており、自分の身体の内部に「外なる自然」を内在している。人間の生命がもっているこれらの事実を、私は「連なりの事実」と呼びたい。

人間は、人間を包みこむ「生命の母体」と連続している。人間は、同じ生命の母体から分化してきた他の生物とも、連続している。そういう生命のネットワークにささえられて、人間は生物として生きている。連なりの事実は、これらのことを指し示す。

生物としての人間には、もうひとつの側面がある。

人間が生き延びてゆくためには、植物や動物を殺して、それを

食べなければならぬ。他の生物の生命を奪って、それを食べる
ことなしには、人間は生きてゆけない。人間が生き続けてゆくた
めには、他の生物の犠牲が必要なのである。もし、他の生物の殺
戮を禁じられたら、人間は食べてゆくことができず、ひとり残ら
ず死んでしまうであろう。

人間にかぎらず、ほとんどの動物は、他の生物を食べたり分解
したりして、自らの栄養源にしている。人間もまた、この生物の
宿命から逃れることはできない。地球上の生物は相互依存して生
きている。お互いに殺し合い、食べ合うことではじめて、動物は
生き続けていけるのだ。

人間は、地球上で生き延びてゆくために、他の生物をとらえ、
殺して食べてきた。そのために植物が根絶やしにされようとも、
動物が苦しみの叫びをあげようとも、人間は彼らを犠牲にして今
日まで生き延びてきた。

人間は、食べることに以外にも、他の生物を利用してきた。たと
えば、植物の繊維や動物の皮を使って、衣服を作った。木を使っ
て住居をたてた。植物や動物を加工して、薬を作った。人間は、
道具を使い始めてから、自分たちの快適な生活のために、他の生
物を殺して利用するようになった。他の生物の生命を大切にす
ることよりも、彼らを犠牲にして自分たちの生活が快適になり、寿

命が延びることの方を選択してきた。

生物としての人間は、自分たちが快適に生き延びてゆくために、他の生物を殺して食べ、彼らを自分たちの生活の素材として利用してきた。これは、人間が今日まで一貫してつらぬいてきた、生活の基本原則である。私はこれを「自己利益の事実」と呼びたい。

自己利益の事実は、他の生物を相手にするときだけ見られるのではない。人間は、同じ人間を相手にしたときにも、自己利益の事実にしたがって行動することがある。たとえば、人間は昔から、食料や土地を争って部族間の戦争を行ってきた。自分たちが快適な生活をつらぬくため、あるいは自分たちの権力欲を満たすために、人間は他の人間を殺したり、奴隷にしてきた。あるいは、共同体の生活レベルを一定に保つために、老人を見捨てたり、新生児を殺したり、人工妊娠中絶を行ったりしてきた。「自己利益の事実」は、人間の社会生活にも影を落としている。

人間は、生命圏の中で、他の生物たちと連続性を保ち、彼らにささえられながら生きていく。しかし同時に、人間は、自分たちの快適な生き延びのために、他の生物や人間を日々犠牲にしながら生きていくのである。

人間は生物として生きていく。それはすなわち、人間が、「連なり的事实」と「自己利益の事実」を同時にかかえこみながら、

生きることなのである。

生物としての人間は、この二つの事実を宿命的に背負っている。この二つの事実には、人間に二つの本性を植え付けた。「連なりの本性」と「自己利益の本性」である。

連なりの本性とは、ひとことと言えば、自分を生み出してくれた「生命の母体」へと回帰し、それと一体となることを願う本性である。それと一体となることを通して自己の生の意味を見出そうとする本性である。人間が海や森の中に生命の母体の姿を透かし見て、自らの内なる自然をそこに交流させようとするときに働いている本性が、連なりの本性だ。

自己利益の本性とは、自分たちの生き残りや、利益や、快適さのために、他の生物や他人を犠牲にしたり搾取してもかまわないと考えてしまう本性である。他人は死んでも自分だけは生き残りたいと思ったり、少々自然破壊をしても自分は快適な生活を送りたいと思ったりする人間のこころの奥底には、この本性が潜んでいる。これは、人間のエゴイズムとか、貪欲な生き方をささえている本性なのだ。

では、この二つの本性は、我々の人類史のどのような位相から発生し、そして我々の内面性のどのような位相に根を下ろしているのだろうか。次回はその点をさらに突っ込んで説明してゆくこ

とにする。

*本連載は、拙論「生命の二つの本性」、『仏教』二七号（一九九四年）および拙論「人間の本性と現代文明」、『中央公論』

五月号（一九九五年）をさらに発展させたものです。重複箇所がありますが、ご了承ください。

第二章

人間の生命には、三つの本性が植え付けられている。

「連なりの本性」「自己利益の本性」「ささえの本性」の三つである。

それらの本性の姿をじっくりと検討してゆくことで、現代の生命と自然の問題を考える上での基本的な枠組みが浮かび上がってくる。

では、まず「連なりの本性」から考えてみたい。

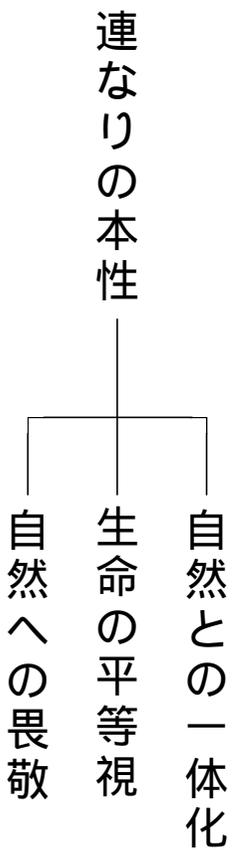
人間は、生命の母体と連続している。

人間の身体のなかには、外なる自然のリズムが脈打っている。人間は、食物連鎖や共生などの生命のネットワークにささえられて生きている。人間は、生命の母体から産み落とされ、そのなかで成長して、生命の母体へと死んでゆく。

このような連なりの事實は、「連なりの本性」を人間に植え付けた。

「連なりの本性」は、自然との一体化、生命の平等視、自然へ

の畏敬という三つの傾向性となってあらわれる。



「連なりの本性」とは、いまここに生きている私の生命と、私を取り巻き私を産みだした大自然とを一体化させたいと願う本性であり、外なる自然と内なる自然を交わらせたいと思う本性であり、大自然と一体化できるような生活を送りたいと願う本性である。都会に適応して生活している人間には、このような本性は自覚されないかもしれないが、しかしそれは身体の奥底に潜んでいて、なにかのおりに噴出してくることがある。

この本性は、「自然との一体化」という傾向性として第一に自覚される。

「自然との一体化」とは、自分を産みだしてくれた生命の母体と一体になることを願う傾向性である。

言い換えれば、大いなる自然への回帰の本性である。

人間は、すべての生命の母体である太古の生命の海から派生した、ひとつぶの泡のようなものだ。人間の身体の中には、生命

の母体のリズムやエネルギーがそのまま生き続けている。生命の母体が、自分自身をこまかく分割して地上に送りだした、そのひとつぶのいのち、それが人間である。

人間は、生命の母体である自然環境をコントロールすることで、文明を築いてきた。人間はそうやって、自分自身を、自然環境から切り離そうとしてきた。しかし、ひとたび自分の身体の内部を覗きこむとき、人間は自分自身のなかに「内なる自然」を発見してしまうのである。

身体の内なる「内なる自然」は、身体をとりかこむ「外なる自然」と呼応し、共振する。人間の肉体のリズムは、あきらかに潮の満ち引きのリズムや、四季のめぐりの周期と呼応している。人間が病気から回復してゆく自然治癒のプロセスは、ちょうど災害で表土が崩れおちた山の斜面に、徐々に緑が回復してゆくプロセスと似ている。実際、木々にかこまれたゆたかな環境のなかで静養するとき、病気はもつとも効果的に治癒へとむかう。これは、人間の内側にある自然治癒力が、外側の自然のエネルギーと交流することによって、活性化されるからであろう。現在の自然科学のことばで言えば、人間の免疫力が、環境要因によって増強されるのである。

人間の内なる自然は、外なる自然と交わりあうことを、つねに

望んでいる。人間の内なる自然は、人間の生命を産みだしてくれ
た生命の母体と触れあい、交流することを望んでいる。「一体化」
の傾向性はここから発生する。

「自然との一体化」は、次のようなかたちであられる。

文明社会のなかでストレスがたまつたとき、我々は、自分たち
を産みだしてくれた生命の母体へと回帰し、そのなかに自分を溶
けこませて一体となり、自分の内なる自然と、生命の母体の自然
とを交わらせたいと感ずることがある。

我々が、生命の母体を感じることのできる場所、それは「森」
と「海」である。木々や植物や動物や昆虫、そして木々のあいだ
を吹きぬける風、鳥のさえざり、川のせせらぎ。森のなかにはい
ると、この森の圧倒的な生命の多様性のなかでは、人間など、生
態系にささえられて生きるちっぽけな生物の一種でしかないこと
を実感できる。木々につつまれて、鳥の声をききながら、風の動
きを全身で感じて歩いているとき、私は自分が大いなる生命の母
体から産み落とされた、ひとつぶのいのちでしかないことを、身
をもつて実感する。木々の枝のあいだから洩れてくる日の光をか
らだにうけて、木の幹や植物の葉に触れ、からだをリラックスさ
せて森全体の雰囲気や全身で感じ取るうとする。そのとき私は、
自分の内にある自然の流れと、自分をとりかこむ自然の営みが、

しずかに交わりはじめるのを感じることができるところ、このとき私は、森という生態系を通して、生命の母体へと自分を回帰させてゆく気持ちを感じているのだ。

あるいは海岸にすわって、しめった潮風を全身に感じながら、打ち寄せる波の音につつまれてみる。波は遠く沖のほうから近づいてきて、砂浜へとはいあがり、無数の泡を帯のように残しながら、砂のあいだへと消えてゆく。波は、砂をひきずるような音をたてながら、くりかえしくりかえし寄せてくる。そのリズムは、私のからだの奥深くにある太古の潮の満ち引きのリズムの記憶を、呼びさます。

浜辺まで降りて行って、海の水に手をひたしてみる。波は私のひらめきを勢いよく洗い流し、そして去ってゆく。そうして、また波が来る。私は、波の動きをひらめきに感じながら、私のからだのなかにある自然のうねりが、この波を伝わって海の底深くまでつながってゆく感覚にとらわれる。そしてその先には、私がまだ見たこともないような無数の魚や、海藻や、プランクトンや、微生物たちが、想像を絶する規模でうごめいている。私は、この海の生命の母体から産み落とされた、ひとつの生物にすぎない。私が死ねば、その身体はこの海のなかに戻ってゆく。そして、プランクトンや魚たちの餌となる。私は、いまひととき、この地上

で、生を楽しんでいるにすぎないのだ。私は、海に全身で向かいあうときに、生命の母体である海との連続性を実感し、そのなかへと回帰してゆく気持ちを味わうことができる。

森や海で自己を解放するとき、人は、このような生命の母体への回帰の実感を味わうことができる。そういう回帰への衝動、それが「一体化」の傾向性なのである。

我々は、自分の中の「内なる自然」を、「外なる自然」のリズムや、その生成消滅のサイクルや、季節の移り行きに寄り添うような形で育んでいきたいと思うことがある。「内なる自然」と「外なる自然」が調和するような生活を営みたいと思ったりする。この考え方は、自然環境の制約やリズムに沿った「環境にやさしい」社会をめざそうという運動を生み出してゆく。その背後には「自然との一体化」の傾向性がある。

自然との一体化は、次のようなかたちに展開することもある。社会のなかで、我々は孤立感や不安感にさいなまれ、なにかに救いをもとめたくなくなるときがある。そんなとき、森や海に行つて、大自然のふところに包みこまれ、生命の母体とつながりあつていることを実感する。そうすることによって、不安は薄まり、安心して、こころは癒されてゆく。

外なる自然と一体となることによって、こころの深い傷を癒し

たい。

こういうところはたらきもまた、「一体化」の傾向性のあらわれである。

こころを癒すために、あるいは自己を見つめなおすために山に入るということが、日本では伝統的に行なわれてきた。こういう営みの背後には、人間の生命に刻みこまれた「一体化」の傾向性があるのだと思う。

志賀直哉は、小説『暗夜行路』の末尾で、大山の大自然に包みこまれることでこころの傷が癒されてゆく主人公の姿を、見事にえがいている。

疲れ切ってはいるが、それが不思議な陶醉感となつて彼に感ぜられた。彼は自分の精神も肉体も、今、此大きな自然の中に溶込んで行くのを感じた。その自然というのは芥子粒程に小さい彼を無限の大きさに包んでいる気体のような眼に感ぜられないものであるが、その中に溶けて行く、それに還元される感じが言葉に表現できない程の快さであった。何の不安もなく、睡い時、睡に落ちて行く感じにも多少

似ていた。(『志賀直哉全集』第五巻 岩波書店 一九七三年「初出一九三七年」 五七八頁 新字に直

した)

さて、この「自然との一体化」の傾向性が、極端なかたちであらわれたときにはどうなるであろうか。

そのときには、それは、自分を産みだしてくれた生命の母体へと、自分自身を完全に溶けこませ、そのなかへと自己を滅してゆきたいという願望となつてあらわれるのだ。生命の母体と完全に一体となるためには、そこから自立して存在している自分の生命を否定し、自分自身をその母体へと消し去ってしまったなければならない。だから、この願望は、もっとも極端な場合、自分の消滅、つまり大自然のなかでの死の願望となつてあらわれる。

そこまでいなくても、大自然のまえで、自分の存在を「無」にしたいという衝動を、人間はもつことがある。人間の脳裏に、大自然につつまれた「死」のイメージがおとずれる。たとえば、先にあげた志賀直哉の小説の引用部分の直後に、次のような記述がある。主人公は、体調を崩して、死を予感している。

……彼は今、自分が一步、永遠に通ずる路に踏出したと
いうような事を考えていた。彼は少しも死の恐怖を感じな
かった。然し、若し死ぬなら此俛死んでも少しも憾むところ
はないと思つた。然し永遠に通ずるとは死ぬ事だという風にも

大自然から離反して、それに反抗しながら生きるのをやめたい。そして、大自然のなかへと自分を溶けこませ、そのなかへと自己を消滅させ、完全に大自然のふところに包まれてしまいたい。こういう、大自然への帰依の感情が、「自然との一体化」の中核部分にある。

自分が死んだあとで、自分の骨と灰を、山や海に戻してほしいという「自然葬」の考え方が、注目をあつめている。これは、死んだあとには、自分を産みだしてくれた母体である大自然へと溶けこみたいという、「一体化」の傾向性のあらわれであろう。

こういう帰依の感情は、「大自然」や「生命の母体」の方が、人間よりも価値の高い存在なのだという考え方を作り上げる。「大自然にくらべれば、人間なんてちっぽけな生きものだ」「大いなる自然の前では、人間の存在なんて無価値だ」。こういう思想が、ここから生まれてくる。「自然環境」と「人間」をくらべれば、自然環境のほうが価値が高いのだという思想が登場するのである。これは「生命中心主義 biocentrism」「環境中心主義 ecocentrism」と呼ばれる。

また、自分を大自然に溶けこませるといふ点が強調されると、

「自己」と「世界」、「人間」と「自然環境」はそもそも一体なのであって、そのあいだに境界を設定するのは間違っているという思想になる。人間の生命も、大自然の生命のネットワークのひとつの結び目にすぎず、人間は大自然と一体になって自己実現をしなければならぬというディープエコロジーの思想も、ここから出てくる。

2 生命の平等視

「連なりの本性」の第二の傾向性は、「生命の平等視」である。生きとし生けるものはみな等しく尊いんだという感覚を、我々はもつことがある。

たとえば、馬や犬などの動物に触ったときに、我々は彼らのなかに、自分と同じような体温と、生きた肉の手触りと、脈打つ心臓の鼓動を感じる。彼らの唾液や、汚物のおいに対してさえ、同じ動物に生まれた共通性を感じることもある。

あるいは、植物や木に対しても、その生き生きとした成長の姿や、実をつけて枯れてゆく姿などに、同じ生物として共有してい

るものを感じることがある。

動物も植物も、実は我々と同じ生きものなのだ！という驚きと感動。

その感動の背後には、馬も犬も植物も人間も、みんな同じひとつの太古の生命の母体から分化して、ここまで生き延びてきたのだという実感がある。

動物も植物も人間も、同じひとつの生命の母体から分かれてきた。だから、それらは生物として共通のものを多く分かちもっている。こういうことを目の前の生物に実感して感動するとき、我々はその生物個体をとおして、その背後に「生命の母体」の存在を直覚している。つまり、目の前の生物を通路にして、生命の母体が、我々の目の前にたちあらわれているのだ。

同じ生命の母体から産み落とされた生物は、すべて貴重で尊く、平等である。こういうふうを考えてしまう傾向性を、我々はもっている。これが、「生命の平等視」である。

「生きとし生けるものは平等であり、ひとしく尊重しなければならぬ」という考え方は、ここからでてくる。すべての生物のなかには、「生命の母体」が平等に内在しているというイメージが、その基本にはあると思う。シュヴァイツァーのような「生物平等主義」の思想も、ここから出ているのかもしれない。すべて

の生物が内在しているところの生命の母体の破片のことを、仏教では「仏性」と呼んだのだろう。「山川草木みな仏性あり」とは、このことだと思う。

この「生命の平等視」は、生物個体だけではなく、森や、そのなかの生態系に対してもはたらくことがある。森のゆたかな生態系は、人間の生命と同じくらい貴重で尊いのだ。そう考えてしまいう傾向性を、我々はもっている。なぜなら、森も人間も、さかのぼれば同じ生命の母体から産み落とされたものだからである。この考え方は、前回述べた「保存」の思想のなかに生きている。ここでは、この平等感覚は、自然が内在している「価値」へと読み変えられる。

もちろん、自然界の生物のあいだには力の強弱がある。とくに人間という生物の力は圧倒的に強いわけで、人間と他の生物とのあいだには圧倒的な力の不均衡がある。しかしながら、獲物を襲う人間も、襲われる兎も、ともに同じ四〇億年前の生命の母体から等しく分化してきたという点においては、まったく平等であると言えるのだ。人間も兎も、同じ源泉から分かれ出てきたという意味においては平等だ。同じ源泉を共有しているという、この感覚が、「生命の平等視」の背後にはある。

ただ、ここで付け加えておかなければならないことがある。

「生命の平等視」の傾向性は、目の前の生物を通路にして、その背後に「生命の母体」を透かし見ることを通して生じてくる。だから、この傾向性は「自然との一体化」とくらべればいくぶん派生的であり、かつ観念的なものである。

その証拠に、我々は、目の前にいるすべての生物に対して、「平等な生命」の実感をもつことはできない。たとえば、蛇やムカデやミミズやゴキブリなどに対して、人間と等しく尊い生命を実感できる人は少ないだろう。これらの生物を前にしたとき、我々の実感は、「生命の平等視」の傾向性を裏切ってしまう。理念ではすべての生物はひとしく尊いと思う人であっても、それらの生物を手のひらに乗せたときには吐き気に襲われてしまいかもしれない。哺乳類、鳥類、植物にならば、そういう矛盾を感じなくて済む。このような理念と実感のズレをしつかり認識しておくべきである。だから、「生命の平等視」の傾向性は、すべての生物個体に対して当てはまるわけではない。しかし、ゴキブリに対する平等の実感はもてなくても、我々は少なくとも「すべての生物は平等である」という観念をもつことはできる。そしてその観念の背後には、連なりの本性があるのだと私は考えている。

生命の平等視の傾向性は、我々の実際の行動とはかならずしも一致しない。

たとえば、我々はすべての生物の生命は平等だと言いながら、牛やブタを殺して平然と食べている。鳥山敏子の授業記録を読むと、自分の手でニワトリを殺すことを「かわいそうだ」と言っただけで、最初は泣き叫んでいた子どもも、お腹がすいてくるとその肉をむしゃむしゃとおいしく食べはじめた（『生命に触れる』太郎次郎社 一九八五年）。すべての生命は平等だと考えながらも、牛やブタを食べ続けられるという事実から目をそらしてはならない。逆に言えば、「生命の平等視」の傾向性は、我々が一方的に牛やブタを殺して食べ続けてきたという事実によつてはびくともしないほど強く、ある人々の内面に刻印されているのである。事実としては自分たちが一方的に殺戮し、搾取しているのであるが、しかしながら生命存在としては彼らも自分たちも平等であるというふうに思いたい、という姿がそこにはある。ここを押さえておく必要がある。

「連なりの本性」から導き出される第三の傾向性として、「自然への畏敬」がある。我々は、大自然の中に、人間を超えた偉大

なもの、神々しいもの、畏るべきものを感じとることがある。そういう自然への畏敬の念の背後に、「連なりの本性」がある。

ただし、自然への畏敬の念は、連なりの本性だけから発生しているわけではない。

我々が、大自然に対して畏敬の感情をもつ理由には、少なくとも二種類ある。ひとつは、大自然の前で我々の無力を自覚して、それが畏敬の感情に転化する場合。もうひとつは、連なりの本性が反転した場合。

まず、自然が人間の力を超えた強大なパワーを見せつけるとき、我々はみずからの無力を思い知らされ、自然に対して畏れの感情をいだく。たとえば、火山の爆発や、都市を襲う震災や、河川の氾濫によって集落が壊滅するとき、我々は自然の偉大な力を見せつけられる。そして、人間の力を超えた、偉大で恐ろしいものを自然に対して感じる。

自然環境を改変する技術がまだ未熟であった時代、人間は自然の猛威を前にしたときのみずからの無力感を、いまよりもずっとはげしく思い知らされていたことだろう。河川が氾濫すれば多くの人々が犠牲になり、作物が一瞬にして壊滅し、住居も失われる。日照りが続けば水が足らなくなり、作物は枯れ、飲み水を求めて人々は右往左往する。

大自然の前では、人間の力などちっぽけなものだ。ひとたび自然が怒り狂えば、人間なんてひとたまりもない。自然は、人間の外部に、人間の思惑を超えてそびえ立つ巨大な存在者である。人間はそれに逆らわないように、頭を垂れて生きていくしかない。そういう自然観があつた。

大自然がもっているそのような巨大な力を、人間は、自然の中に棲む「魔物」や「妖怪」の力としてイメージした。人間の集落を取り巻く森や山や海は、不可思議なパワーをもった魔物がたくさん棲む場所である。人間がそういう場所に入っていくと、ときおりそれらの魔物と出会ったりする。そして、人間が彼らの気に入らないことをしてしまったりすると、そのしっぺ返しがかかる。日照りが続いてたくさんの人々が死んだりする。人間は、彼らの怒りを鎮めるために、彼らをなだめなければならぬ。日本において、ヨーロッパにおいても、森や山の中は魔物の棲む場所であつた。それは、人間の力と予測を超えた、不可解な自然の力を形象化したものだったと言えるし、昔の人はそういう存在を実際に目で見ていたにちがいない。そういう不可解で巨大な力をもつた大自然を前にしたときに、人間が畏敬の感情を覚えるのは不思議ではない。我々が現代でも大自然に対して畏敬の感情をもってしまうひとつの理由は、我々が古代より抱き続けてきた、大自然

の巨大な力に対する畏れとおののきの感情が、いまなお残存していることにある。

我々が自然に対して畏敬の感情を抱いてしまうもうひとつの理由は、連なりの本性と関係がある。

人間は、みずからを取り囲み、みずからを産みだしてくれた大自然と一体になりたいと思う本性をもっている。これが、連なりの本性であつた。しかし、大自然とくらべてみれば、人間なんてほんとうにちつぽけな存在でしかない。人間とは、生命の母体が四〇億年かかつて分化してきた無数の生物体の、そのひとつの泡粒にしかすぎない。

大自然はその泡粒としての私を包み込んでいるのだが、それと同時に、私というものを完全に超えた存在でもある。私が死んで肉体がばらばらになつて消滅しても、大自然はなにごともしなかつたかのように悠々と存在し続ける。人類という種が絶滅したあとでも、大自然はゆつくりと姿を変えながら存続し続けていくであろう。連なりの本性によつて私が一体化したいと願っている大自然というものは、あらゆる意味で、私というちつぽけな人間を完全に超えた存在なのである。大自然の前では、私という人間の存在は、ひとつのエピソードにすらならない。

大自然に溶け込みたい、そしてそれと一体化したいと願う「連

なりの本性」は、究極的には、大自然の中に溶け込むことで私を「無」にしたいという願いとなり、それは同時に、大自然の偉大な存在を、「無」である私の頭上はるかに冠のように戴きたいという願いとなる。偉大なる大自然の前にひれ伏したくなるのだ。大自然の前で私が「無」になるのだから、「無」である私の前では、大自然は「無限大」となり、「超越」となる。そして、そういう無限大の大自然に対する畏敬の感情が現われてくるのである。私をちっぽけな泡粒としてのみこんでしまう大自然は、私に比して無限に大きく無限に偉大なはずである。私をのみこむ無限に偉大なものに対して、畏敬の感情が生じるのは当然のことである。

人間が大自然に対してもつこのような感情から、宗教のいくつかの基本的な観念が生じてきたのかもしれない。たとえば、「超越」や「超越者」という観念の成立は、大自然と人間のこのような関係性への洞察から生じたのかもしれない。たとえば、連なりの本性に見られるように、人間は、みずからを包み込み、みずからを超えた存在と一体化しようとする本性をもっている。このとき人間は、自分を超えたものと一体になりたいという、いわば自己矛盾に近いことを試みているわけである。ほんとうに自分を超えているのであれば、一体となれるわけではないし、もし一体とな

つてしまえば、自分と大自然との区別はもはやつかないはずである。この、「自己を超えたものと一体となる」という自己矛盾的な衝動を突き詰めていくとき、そこに「超越」という観念が誕生するのではないだろうか。

もちろん、超越の概念についてはもっと精密な議論が必要なので、ここではこれ以上は述べない。しかし、我々に刻印された「連なりの本性」や「自然との一体化」の傾向性が、自然への畏敬へと結びつき、さらに宗教的な超越の観念へと結びついてゆく、そういう筋道があり得るということだけは確認しておきたい。

自然との一体化、生命の平等視、自然への畏敬なんてロマンティシズムにすぎないという批判もあるだろう。しかし、そのロマンティシズムは、生物としての人間の本性に根差したものである。そして、そのロマンティシズムは、ときとして、人間の思考パターンに大きな影響をあたえ、人間の行動を決定してゆく。

「連なりの本性」が、人間の思想と行動にあたえる影響力を、軽

視してはならない。

その一例として、人間集団に見られる「連なりの本性」というものがある。

それは「全体主義」である。

「自然との一体化」が、人間の集団に投影されると、「全体主義」という派生形態をとる。

「自然との一体化」は、本来、森や海などの生態系に、生命の母体を透かし見るものである。しかし、我々は、ときおり家族や、地域社会や、スポーツのグループや、国家などを通路にして、生命の母体を透かし見ることがある。

たとえば、サッカーのチームと、スタジアムの観客がつくり出す人間集団の場に、我々は自分を一体化させて、溶けこませようとするところがある。あるいは、ナチズムに見られたように、国家や民族という（いくぶん抽象的な）人間の集団に自分を溶けこませ、そこへと自分を消し去ろうとすることもある。

人間の集団に投影された「一体化」は、はげしい「熱狂」を生みだす。サッカーの試合の熱狂や、ヒットラーの演説会場に見られたような熱狂である。この熱狂は、そこに参加する人間たちから自意識を奪い、彼らの自己を消し去って、彼らをその集団へと帰依させる原動力となる。その熱狂は、興奮と、感動と、暴力と、

暴動をひきおこす。そこに参加している人間は、そもそも自己を消し去りたいという本性に動かされて集まっているのだから、熱狂による自己忘却作用は彼らにとって好都合である。

個々の人間よりも、彼らがつくりあげている「集団」の価値の方が高いのだという思想が、ここからでてくる。

個人よりも、チームの方が価値が高い。個人よりも、国家や民族の方が価値が高い。だから、国家のためならば、個人には死んでもらいます。こういう形の全体主義が導かれるのだ。

全体主義とは、生命の母体へと回帰しようとする「一体化」の傾向性が、人間集団のレベルでストップしたものである。

これは、つぎのように言い換えることもできる。

全体主義とは、生命のひとつの自己展開である。全体主義のなかで、我々の生命のひとつの本質が、生き生きと躍動しているのだ。全体主義は、我々の生命を圧殺する悪の権化のように言われることが多いが、それだけではない。全体主義という形をとることによって、自分を超えたものと一体化したいという我々の内なる生命の本性が満足させられ、癒されていくのである。

ナチズムの時代に、自然保護が強調され、エコロジー思想がもてはやされたことは有名だ。人間を圧殺する全体主義の時代に、どうしてエコロジー思想が盛んになるのか疑問視する人は多い。

しかし、「連なりの本性」という観点から考えれば、どうしてナチズムのような全体主義と、エコロジー思想が親和的なのかが分かってくる。

「保存」や「ディープエコロジー」のようなエコロジー思想の根本には、自分を大自然へと溶かしこみ、そこへと自分を帰依させたという本性がある。この本性は、自分を国家や民族などの人間集団に溶かしこみ、そこに帰依したいという全体主義の本質と、まったく同じものなのだ。その両者の背後には、同じ「連なりの本性」がある。

全体主義を準備する心情と、「ディープエコロジー」の思想に共鳴する心情は、通底している。「連なりの本性」が、その両者を、同時に準備するのである。全体主義が、「森」「大自然」「生命の連続性」などをキーワードとして使う理由のひとつは、あきらかにここにある。

日本でも、大正時代の生命主義思潮は、「大自然」や「生命の神秘」などを前面に押しだしていた。しかし、それらの言説は、やがて日本国家の全体主義へとからめとられていった。ここにも、同じ構造が見られるのである（鈴木貞美編著『大正生命主義と現代』河出書房新社 一九九五年

参照）。

第三章

前回は、人間の生命に刻印された「連なりの本性」について考えた。

今回は、「自己利益の本性」について詳しく考えてみる。

その前に、「人間の生命の本性」について、もう一度振り返っておきたい。というのも、前回までの連載を読んでくださった読者から、「人間の生命の本性」についての疑問がいくつか出されているからである。

「人間の生命の本性」とは、次のようなものであった。

生命としての人間の奥底に深く刻み込まれていて、人間の思考様式や行動パターンの基本を決定する宿命のようなもの。それらを見下したり軽視した判断や行動を人間が続けたときには、あとでこの本性に復讐される。

このような定義に対して、次のような疑問が出されている。

まず、この「人間の生命の本性」は、地球上に存在するすべての人間にあてはまるのか？たとえば、今回述べるような「自己利益の本性」などは、環境破壊的な生活をしている先進諸国の人間たちには当てはまるとしても、環境にやさしいライフスタイルを維持してきたエコロジカルな先住民などには、当てはまらないのではないか？

この疑問に対しては、私から逆にいろいろ聞きたいことがある。環境にやさしいライフスタイルを維持してきたエコロジカルな先住民たちは、たとえば、食料を争って闘争をしたり、戦争をしりしないのだろうか。彼らは、自分たちの生き残りのために、ほんとうに他を犠牲にしないのだろうか。このあたりのことは、文化人類学的な資料をもとにして、もっと細かく詰めなければならぬ。

しかし、その作業を完成するまでのあいだ、とうぶんは、「人間の生命の本性」は、少なくとも現在の先進諸国に住んでいる、産業化されたライフスタイルをもった人間たちには当てはまる（し、そうでない地域に住む人たちにも大枠では当てはまる）という前提で考えてゆきたい。現在の地球環境問題を引き起こしている張本人は、やはり、植民地支配と高度な産業化を推進してきた先進諸国の人間たちなのだから、彼らに明確に刻印されている

本性を探ることから出発することに大きな意味があると思うのである。

第二の疑問は、「人間の生命の本性」は、いつたい人間のどこに刻み込まれているのかというものである。これに関しては、連載第一回のように、人間の生命の本性が「人間という生物体のどの場所に刻み込まれているのかについては、言及しないことにしたい」と述べた。しかし、それだけでは、たしかに不充分である。

私の、いまの考えは、こうだ。

「人間の生命の本性」というものがあるとして、それが人間の身体の内部分に刻み込まれているという考え方は間違っている。人間の身体は、それを取り巻く物理的環境や、文化的環境や、社会的環境との相互関係のただなかで生成変化してゆく。だから、「人間の生命の本性」は、人間の身体の内部分にあると同時に、その外部にもまたあると言わなければならない。

したがって、人間の生命の本性が刻印されている場所を、物理的に特定するのは不可能である。強いて言えば、それは、「肉体・細胞・遺伝子・脳などの人間の物質的構成」+「社会制度や社会装置」+「文化や言語やイデオロギー」の複合体のネットワークのなかに刻印されていると考えられる。

人間の本性は人間の遺伝子の中にすべて組み込まれているとい

うような、俗流の社会生物学の考え方には、はつきりと異を唱えたい。

第三の疑問は、「人間の生命の本性」はほんとうに 不変のものなのかというものである。それは、人間にとって宿命であつて、いくら我々が努力しても、けつして変えるこのとのできないものだと言うのか？ それは、とてつもないペシミズムではないのか？

これは、さきほどの第二の疑問とも重なつてくる。

私は、「人間の生命の本性」は人間の身体の中だけにあるのではなく、社会制度や文化の中にもあるのだと言つた。だが、社会制度や文化は、時間がたてばいくらでも変わり得る。ということ、社会制度や文化に刻み込まれている「人間の生命の本性」は、それだけではない。遺伝子操作によつて、人間の遺伝子それ自体を改変できる可能性が開けはじめている。すると、遺伝子を変えることで、人間の生命の本性が変わつてしまふ可能性だつてあるのではないか。

私は、「人間の生命の本性」の内容や、本性間の力関係などは、長い時間をかければ変わり得ると考えている。社会システムが激変するときに、その社会システムが補強してきた「人間の生命の

本性」の現われかたや、その強度などが変わってしまったことはあり得る。あるいは、文明の進展にともなつて、「連なりの本性」が力を増してきたり、逆に「自己利益の本性」が強くなつてきたりすることもあり得る。あるいは、遺伝子を改変することによつて、異様に利他的な人間が出現するかもしれない（しかしそのよくな人間たちが子孫を維持していけるかどうかは分からないが）。

だから、長い時間をかければ、「人間の生命の本性」の内容や、本性間の力関係は変わり得る。では、それはどのくらいのタイムスパンなのだろうか。おそらく、最短でも「人の一生」よりは長いはずだ。ひよつとしたら、進化論的スケール、すなわち数万〜数百万年くらいかかるのかもしれない。つまり、私たちは、「人間の生命の本性」が変化していくのを、この目で確認することはできないのだ。

しかしながら、「人間の生命の本性」の内容や、力関係は変わることがあつても、これから述べていく三つの本性のどれかひとつが消滅することは、おそらくないだろうと思う。もし、ひとつでも消滅すれば、そのときにはわれわれはもはや「人類」ではなくなつていくはずだ。

さて、本題に戻ろう。

「自己利益の本性」とは、どのようなものなのだろうか。

人間は地球上で生き延びてゆくために、他の生物をとらえ、殺して食べてきた。そのために植物が根絶やしにされようとも、動物が苦しみの叫びをあげようとも、人間は彼らを犠牲にして今日まで生き延びてきた。生物としての人間は、自分たちが快適に生き延びてゆくために、他の生物を、食料や生活の素材として利用してきた。これが、人間が今日まで貫いてきた、生活の基本原則である。

自分たちの生き延びと快適な生のためには、他の生物をいくらか犠牲にしてもいいという姿勢があったからこそ、人間は数百万年をへて今日まで生き続けて来られたのだ。そうなければ、とつくの昔に絶滅している。

この冷厳な事実を直視しなければならぬ。

人間は、生命圏の中で、他の生物たちと連続性を保ち、彼らにささえながら生きている。しかし同時に、人間は、自分たちの快適な生き延びのために、他の生物や人間を日々犠牲にしながら生

きているのである。

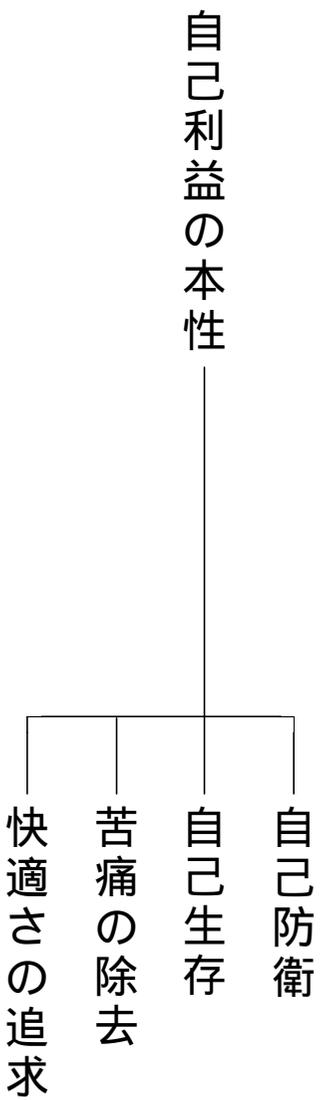
この後者の事実、人間に「自己利益の本性」を植え付けた。

「自己利益の本性」は、人間が自分たちの利益を最優先して行動することを肯定する。「自己利益の本性」とは、自分たちの生き残りや、利益や、快適さのために、他の生物や他人を犠牲にしたり搾取してもかまわないと考えてしまう本性だ。

他人は死んでも自分だけは生き残りたいと思ったり、少々自然破壊をしても自分は快適な生活を送りたいと思ったりする人間のこころの奥底には、この本性が潜んでいる。これは、人間のエゴイズムとか、貪欲な生き方をささえている本性なのだ。

この「自己利益の本性」は、人間の中にもっとも根深く植え付けられた本性である。いったんそれが発動しはじめると、生命圏の中で他の生命体と交わりたいという「連なりの本性」や、共同体の中で他人とささえあって生きてゆきたいという「ささえの本性」を力づくで駆逐してしまうパワーを持っている。

さて、「自己利益の本性」の内容は、大きく四つに分かれる。



第一は、「自己防衛」である。人間は、災害にあつたときや、山で猛獣に襲われそうになったときに、とにかく自分の身を守るうとして、一目散に逃げる。身につけていた大事なものなんか放りだして、とにかく助かろうとする。この本性の前では、他人への配慮なんかふつとんでしまう。沈没寸前の船から脱出するとき、他人をふりはらってまでも、自分が先に救命ボートに乗ろうとする。そのあとで、他人に手をさしのべるのだ。こういう場面で、他人を優先したり、自己犠牲をする人間は、ほんとうに少ない。だから、たまにそつという人がいると、美談としてとりあげられる。

この本性は、人間の集団レベルでもはたらくことがある。たとえば、最近の地球環境問題に対する関心のたかまりは、あきらかに人間の集団としての自己防衛の本性が、おもてにあらわれてきた例である。いま環境破壊をくいとめないで、人類が地球上で生き延びてゆけなくなるかもしれない。そういう危機感に突き動かされて、みんなが地球環境問題の解決に必死になる。こういう動

機をもった環境運動の基本には、自己防衛という名のエゴイズムがひそんでいる。人類が滅んだとしても、地球生命圏は痛くもかゆくもない。生命圏は、人類なしで生き続けてゆくだけのことだ。

第二は、「自己生存」である。ある一定レベルの生活を営みながら、とにかく自分が生き続け、子孫を残してゆくことを優先してしまふ本性である。自己生存の傾向性も、個体レベルではたらくときと、集団・種のレベルではたらくときがある。

自己生存の傾向性が、個体レベルではたらくれば、この私になるべく長くいつまでも生き続けたいという不老長寿の願いとなる。

自己生存の傾向性が、集団のレベルではたらくとき、それは家族や共同体を滅ぼさずにずっと維持してゆこうという衝動となつてあらわれる。集団のなかで子供をきちんと育て、成人させてあらたな家族を作らせ、そして次の世代を産んでゆく。そのために、人間は共同して作業をおこない、集団の秩序を形成してゆく。災害からの防御や、食料の確保などについても、全員で計画的な行動をとるようになる。集団の維持という本性は、ときとして個人の自己生存の本性と衝突する。集団のあしでまといとなる人間は、集団によって見捨てられることもある。また、異なった共同体のあいだで、生存をかけた戦いが繰り広げられることもある。

心臓移植でしか助からない我が子を、移植によってなんとかし

て助けをあげてくださいと泣きながら訴える母親は、この家族レベルの自己生存の本性に突き動かされているのだ。そう言われると誰も反対できなくなるのは、みんなが、その同じ本性を、自分の内側にかかえているからであろう。

自己生存のためならば、人間は、他人や他の生物を平気で犠牲にする。

人間は、生き続けてゆくために、他の生物を殺して食べなければならぬ。お腹がすいているときには、すべてが食べ物に見える。豚や牛がかわいそうなんて、言ってられない。動物の屠殺場を見たあとでも、動物実験の現場を視察したあとでも、我々はきちんとご飯を食べる。そのあとで、動物の福祉について議論するのだ。

動物の皮を使った衣服や靴を身にまとい、植物の繊維や木材を利用して建物を作って寒さにこごえ死なないようにする。最低限の衣食住を満たすためには、人間はなんでもする。そういう本性を、人間はもっている。

第三は、「苦痛の除去」である。苦痛や苦しみの多い生活よりは、それらの少ない生活の方を、人間は選び取ろうとする。ケガや病気などの身体の苦痛、悩みやストレスなどの精神的な苦しみ、これらを取り除くためには、人間はなんでも試みる。医療と宗教は、目の前の苦しみからなんとかして逃れたいという人間の叫びに答えるために、発展してきた。この苦しみから解放されるのならば、生きものだって、他の人間だって、なんでも犠牲にできる。だから、なんとかしてこの苦しみを取り除いてほしい。こう訴えてしまう本性が、人間のなかにはたしかにある。

たとえば、末期ガン患者がなによりもまず求めることは、日々襲ってくる耐えがたい苦痛からの解放である。モルヒネやステロイドを使った疼痛緩和ケアが、末期医療の中心となる。身体的な痛みから解放されることが、患者の第一の願いだ。痛みが少なくなつてから、患者は、自分の残された生について、ようやくきちんと考えはじめられるようになる。

末期ガンの苦しみがあまりにも耐え難いとき、患者は自殺を試みることがある。耐えがたい苦しみよりは、安楽な死を。「苦痛を取り除きたい」という人間の本性は、ときとして、「自己生存」の本性を凌駕するほど強くなる。

以上三つの傾向性、すなわち「自己防衛」「自己生存」「苦痛の除去」が、もつとも基盤的な「自己利益の本性」である。

これらから派生してくる傾向性として、「快適さの追求」がある。

人間は、とりあえずの苦しみを取り除かれると、こんどは快適な生活を求めるようになる。たとえば、夏はすずしく、冬はあたたかい生活。災害の危険がすくなく、安心してくらせる環境。いつでも食料があつて、不快な虫がすくないこと。ご飯は、料理してなるべくおいしく食べたい。それが生きる意味にもつながってゆく。

そういう快適な生活を続けてゆきたいという本性は、根深い。そういう衝動に突き動かされて、技術が進歩してゆき、文化が作られてゆく。快適な生活のためには、生態系を改造してもしかたがない。木をいっぱい切つて、生活のために使つてもしかたがない。めずらしい動物をつかまえてきておいしく食べたり、その動物から薬を作つて役立つことは、悪いことではない。あるいは、共同体がある一定の快適な生活を続けてゆくために、あしでまといになる人間や、調和を乱す人間を追放してもかまわない。自分たちが快適になるためならば、他の人間たちを使用人として使つてもかまわない。今日の南北問題とはそういうことだ。こういう

ふうと考えてしまう本性が、人間にはある。

この快適さの追求がさらに高まると、「欲望の追求」になる。生活のある程度の快適さが満足されると、人間は、もつといろんなことをしてみたいという欲望のとりこになる。いまよりもっと多くの物質や環境や商品にかこまれていたい。時間をもつと自身ののために使って、いろいろなことを経験したい。自分の身のまわりの状況や、世界の状況を、自分の思いどおりに変えてみたい。自分のもっている可能性をもつと開花させて、いまとは違った生活を送ってみたい。もつとおいしいものを食べたい。もつと性的な快楽をたのしみたい。他人を自分の思いどおりに動かして、権力欲を満足させたい。できるかぎり長生きして、健康な生活を楽しまたい。できることなら老いたくないし、死にたくない。自分の欲望を満たすためならば、他人が少々犠牲になってもかまわないと考える人間もいる。

「欲望」の問題については、本連載の後半で、もう一度別の角度から考察する予定である。そのときに、もう一度触れることにしたい。

以上に述べたように、「自己利益の本性」には、基盤的なものと、派生的なものとの二種類がある。

基盤的なもの …… 自己防衛、自己生存、苦痛の除去
派生的なもの …… 快適さの追求

ただし、派生的なものが、基盤的なものよりもインパクトが少ないという意味ではない。近代以降の文明では、むしろこの派生的なもの肥大が進行しているとも言える。

自己利益の本性は、我々の身体と文化と制度の、もつとも深いところに刻みこまれている。それは、人間が、他の生物からの脅威や、自然環境の変動などに打ち勝って生き延びてゆくために、どうしても必要な本性だったのである。この本性は、ときとして、自分だけよければそれでよいという態度となつてあらわれる。そして、倫理や宗教は、そういう態度を克服することをつねに訴えてきた。しかし、自己利益の本性が、倫理や宗教によって満足に制御された例はない。それほどまでに、この本性は強大なのである。

我々は、口では美しいことを言いながらも、ふと気がつくとき、自分のためや、自分の仲間のために行動していることがある。他人よりもまず、この自分が助かりたいという衝動から逃れることはできない。他人の苦しみよりも、自分の苦しみのほうが大事。他人の子どもよりも、自分の子どもの将来のほうが大事。本能や

欲望で動かざるを得ないとき、私の身体に刻印された「自己利益の本性」は、もつともよく発動する。

この「自己利益の本性」は、ほかならぬ人間の生命に刻み込まれている。我々が「生命」であるかぎり、我々はこの「自己利益の本性」を逃れることはできないのだ。この、もつとも強大な本性を正面から見据えることなしに、いくら倫理や道徳を説いてもむなししい。それどころか、それは、どうしようもない欺瞞へと我々を導いていってしまうのである。

たとえば、畜産を考えてみるとよく分かる。人間は、自分たちが食べるためだけに動物を大量に飼って、食肉にしている。動物たちは、人間に食べられるためだけにきゆうくつな部屋に閉じこめられて餌を与えられ、成長の途中で殺される。人間が、自分たちの生き残りと、快適な食生活のために、動物たちを一方的に犠牲にしていることは明らかである。そのことには、ほとんどの人間が気付いている。しかし、先進国の人間がこの仕組みを捨てさつて、畜産を放棄することは、きわめて難しいと思う。そのためには、強大な自己利益の本性を、否定しなければならぬからである。「自然との共生を！」と主張している人には、畜産を保持したままどうやって自然との共生を達成するつもりなのか、本気で聞いてみたい。この点をうやむやにしたまま、そのかけ声に付

和雷同している人々にも、同じことを聞いてみたい。

4 個人としての自己と集団としての自己

「自己利益の本性」を、さらに別の角度から考えてみよう。

「自己利益の本性」には、自分たちのグループと、それ以外のものを、きっちりと区分したうえで、自分たちの利益を追求していかうとする性質がある。

この点に注目すれば、次のように定義することも可能である。

自己利益の本性とは、人間が、生命体や人間自身を、「自己」と「それ以外のもの」に区分し、「自己」の利益のために「それ以外のもの」を利用してゆこうとする本性である。

この文章を読むと、すぐに気になることがある。

「自己」って、いったい何なのだろう。

いったい何が「自己」の仲間としてカウントされ、何が「それ以外のもの」として排除されるのか。このあたりのことを詰めて

みなければならぬ。

では、まず、「自己」の範囲から考えてみよう。

「自己防衛」を例にとる。沈没寸前の船から、他人を押しつけて我先に脱出しようとする乗客たちを突き動かしているのは、乗客ひとりひとりの自己防衛、すなわち 個人 の自己防衛の本性である。このときに、「自己」としてカウントされるのは、この私という個人だけである。自己≠個人となっているのだ。

ところが、敵国からの攻撃を退けようと、国民が一体となって戦っている場合ではどうだろうか。私は、自国を守るための戦いに、身を捧げている。私は、自分の国と国民を守らなければ、という思いで必死に戦っている。この場合、私は国民や国家を、自分たちの仲間、すなわち「自己」として認識している。国民や国家という「自己」の利益のために、私は敵国をやっつけようとする。ここでは、自己≠国民となっている。

だから、「自己利益の本性」と言うときの「自己」は、あるときはひとりの個人だったり、あるときには人間集団だったりするわけだ。

このあたりを、もう少しくわしく見てみたい。

まず、自己≠個人の場合。

このときの「自己利益の本性」は、いわゆる エゴイズム で

ある。自分自身の利益のために、他人を犠牲にしたり、他の生物を利用したりする。なによもまず、自分自身のことを考えて行動する。そのあとで、余裕があれば、他人にも気をくばる。自分になるべく楽をして、得をして暮らしたい。

個人のエゴイズムがどのくらい根深いものかについては、多くを語る必要はない。誰だってその深刻さには頭を悩ましている。沈没寸前の船の話は、誰もが身につまされる。生命と人間について語るときには、この個人のエゴイズムの存在に、けっして目を閉ざしてはならない。それを直視することなく、美しいことばだけを歌う言説は、無力な建前論にしかならない。

次に、自己「集団となる場合。

たとえば、日本の国家や国民を「自己」として認識し、そのレベルで自己利益の本性がはたらきだすとき、それは「ナショナルリズム」となる。スポーツの世界大会で、「がんばれ、ニッポン！」のかけ声とともに、日本人選手の優勝を手に汗握って願うとき、私はナショナルリズムという形の自己利益の本性にとりつかれているのである。そして、日本人選手が優勝できるためならば、他国の選手が転んで棄権することすらこころの隅で願ったりする。他国の選手を踏みにじってまでも、自国の選手を優勝させたいという思いの背景には、自己のためならば他のものを犠牲にしてもか

まわないと考える自己利益の本性が脈打っている。

人間には、自分が他人よりも優位に立ち、他人よりも多くの富と快楽と名誉を得ることによって満足する傾向がある。そして、そういう社会的成功をめざすときに、人間は歯をくいしばって努力するものだ。自分の成功は、他人の不成功をもものさしにして測られることが多い。他人にはできなかったことを、自分が達成できたことで、満足とよろこびを得るわけである。他人を犠牲にしても、自分が満足したいという本性である。

この傾向は、国家レベルでもあらわれる。たとえばアメリカ人は、自分たちが世界一であることに誇りをいだき、それを維持することに執念を燃やしてきた。いまでは、急成長してきた日本人が、同じような誇りと満足とを味わおうとしている。自分たちの国家が、他の国家よりもすぐれていることを誇りに思い、それができるかぎり維持しようとするパワーが、ナショナリズムの原動力となる。

ナショナリズムだけではない。同じような現象は、「民族」「人種」「宗教」「階級」「性」「家族」「会社」「地域」「学校」などの集団に対しても生じる。民族に自己を重ね合わせるとき、それは民族主義となり、人種に自己を重ね合わせれば人種差別主義（レイシズム）となる。

自己に重ね合わされる集団の範囲がいちばん大きくなったとき、それは人類全体にまで拡大する。人類規模にまで拡大された自己利益の本性は、人類の快適な生き残りのために、他の生物や自然環境を管理し、利用しようという思想を導く。連載第一回のときに述べた、自然保護における「保全」の思想がそれである。

人類の範囲に、いま生きている人類だけではなく、将来世代の人類も含めるべきだという考え方がある。「持続可能な開発」や「世代間倫理」の思想である。将来世代までもふくめた人類全体の利益のために、自然環境をかしく利用していこうという考え方だ。このときの「自己」は、過去から現在をへて将来へと連続と続いてゆく人類の総体がイメージされている。

このように、「自己」の範囲は、人間個人のレベルから、人類の総体のレベルにまで、様々に伸び縮みする。

だとすると、自己利益の本性は、様々なレベルで、複雑怪奇な衝突を繰り返すことになる。

たとえば、Aさんの自己利益と、Bさんの自己利益が、社会の中で衝突する。それだけではなくて、Aさんの自己利益が、国家の自己利益と衝突することだってある。あるいは、宗教団体の自己利益と、国家の自己利益が正面衝突することも、歴史上たくさん起きている。国家のあいだの自己利益（国益）は、たえず衝突

している。それらの衝突を回避したり、調停したりする装置として、我々は、武力や法や経済システムを使う。ここでは、倫理の出番はあまりない。

5 自己の範囲

前項のような整理は、「自己」の範囲を、個人 集団という軸でとらえたものだ。

ところで、我々は、「自己」の範囲を、もうひとつ別の視点でとらえてみる必要がある。

それは、どういう性質を持った存在者が、「自己」のグループに組み入れられるのか、という視点である。

簡単に言ってしまうえば、イルカは「自己」のグループに入るのか、あるいは障害者は「自己」のグループに入るのか、ということだ。

自己利益の本性というのは、「自己」のグループの利益のために、それ以外のものを利用していこうとする本性だ。だから、イルカを「自己」のグループに入れて考えてしまう場面であれば、

イルカは我々の自己利益の本性の犠牲者にはなりにくい（イルカは友だち）。しかし、イルカをそこに入らないものとして考えてしまう場面では、イルカは我々の自己利益の本性の犠牲者になってしまいがちである（漁のじやまになるイルカの集団殺害）。

どのような存在者が我々の仲間なのかという問題は、生命倫理の場面で繰り返し論じられてきた。人工妊娠中絶の場面では、胎児はひとなのかどうか争われてきたし、あるいは、動物実験は倫理的に許されるのかどうかという論争が続いてきた。

それらの難問を「自己利益の本性」の視点から眺めてみる。すると、そもそも我々の仲間としてカウントされるのはどのような存在者なのか、そして我々の仲間の利益のために犠牲になってもしかたないものは誰なのか、という問題が浮かび上がってくる。これは、つまり、「自己」のグループと、そこに入らないものとのあいだの線引きを、どこですればいいのかという問題である。

そして、いったん線引きが確定すれば、「自己利益の本性」は、我々はその線引きの外に出てしまったものを犠牲にしたり利用したりすることを、積極的に肯定する力となってはたらくのである。

ここで、この問題にかんする従来の議論を整理しておきたい。「自己利益の本性」の視点から整理することで、生命倫理の難問にあらたな光が当てられるかもしれない。

まず、「ヒューマニズム」の考え方がある。

「ヒューマニズム」は、この世に生まれてきて、我々とともにすでに生活している人のことを我々の仲間だと考える。だから、大人や子供や赤ちゃんは、我々の仲間である。しかし、死んで冷たくなった死体や、初期 中期の胎児や、受精卵や、他の生物は仲間ではない。脳死の人も我々の仲間ではないとされることが多い。したがって、この場合、自己利益の本性は、人間の死体の臓器を移植のために利用したり、中絶胎児の細胞を使って病気の治療をしたり、動物実験をすることを肯定する原動力としてはたらく。

これは、私たちにとっても、けっこうなじみぶかい考え方だと言える。要するに、いまこの世に生まれてきていて、我々といっしょに生活している人間を、大事にしていこうという考え方だ。そして、そういう人間たちの自己利益は積極的に肯定して、彼らのために、死体や胎児や動物などを利用してゆこうというものだ。

こういうふうに書いてしまうと、「ヒューマニズム」というのは、なんか「生命あるもの」を大事にしない、冷たい考え方のように受け取られてしまうかもしれない。しかし、必ずしもそんなことはない。我々と同じような生活を営んでいない受精卵や、社会・言語・文化を共有していない動物たちの生命もまた大切な

は分かり切っている。だが、それらの生命と我々の生命を天秤にかけなければならぬとするならば、あきらかに我々の生命のほうが重いとみなすのである。

第二に、「人間種中心主義」がある。

「人間種中心主義」は、胎児や受精卵をも「生きている人間」の仲間に入れる。そのまま育てゆけば、一人前の人間へと成長する可能性をもった胎児や受精卵を、我々の仲間にくくめようと考え。要するに、生物学的に見て「生きている人間」は、すべて我々の仲間にいれるわけだ。脳死の人については、それを死体とみなして除外することが多い。

したがって、この場合、自己利益の本性は、死体からの臓器移植や、動物実験は容認するが、人工妊娠中絶や受精卵の研究利用には反対するような原動力となるはずだ。生物学的な人間（ホモ・サピエンス・サピエンス）という種に属するものと、それ以外の種に属するものを、厳格に区別するところから、「人間種中心主義 speciesism」（あるいは「種差別主義」と呼ぶ）。

この考え方の背後には、人間の生命は、それ以外の生物の生命よりも価値が高いという思想がある。だから、現に生きている人間の生命や、これから大人になっていく可能性をもった人間の生命を、とくに大事にしようとする。ヨーロッパでは、キリスト教

がこの思想を育んできた。生命倫理の議論で、保守派の論陣を張る勢力は、キリスト教からの影響が強い。ちなみに原始仏教でも、人間の生命は、他の生物の生命よりも一段高い位置にあると考えられている。なぜなら、他の生物よりも、人間のほうが悟りに近いからである。（普遍宗教は、一般に、女よりも男のほうが価値が高いと考えてきたことも忘れてはならない）。

第三に、「パーソン論」「人格論」と呼ばれる考え方がある。

これは、「自己意識」（自分で自分自身を意識できる能力）や、「利害関心」（なにが自分の利益になるのかを考えることができること）や、「理性能力」をもった人間だけが、我々の本当の仲間なんだとみなす考え方である。

呼びかけに対するある程度の「応答力」や、ある程度の「知能」「IQ」がないと、我々の仲間とは言えないとする考え方もある。この考え方にしたがえば、胎児や、重度の植物状態の人間は、我々の仲間からはずされることになる。痴呆性老人や、重い障害をもって生まれた新生児なども、仲間からはずされる可能性が高い。（そのかわりに、知能の高いイルカや猿などの動物を、仲間に入れる思想家もいる。）

パーソン論は、自己意識や利害関心や理性能力がしっかりとある一人前の人間だけを、我々の仲間とみなす。そして、そこから

はずれる人間たちを管理したり、自己利益のために処分したりすることが許されるとする。

パーソン論の立場に立てば、重度の障害を持った胎児を中絶することは、倫理的に許されることになる。あるいは、意識レベルが低下して理性的にものを考えられなくなった老人の医療レベルを、家族の都合で左右することもまた許されることになる。パーソン論とは、極端に言ってしまうえば、一定の「精神能力」がある人は仲間に入れるが、「精神能力」がとてつもなく低い人は仲間とはみなさないという思想である。

第四に、痛みを感じる存在を、仲間とみなす考え方がある。パーソン論とよく似ているが、とくに「痛み」を感じるかどうかを重視する点が、特徴的である。これをかりに「痛み主義」と呼んでおこう。

「痛み主義」によれば、痛みを感じない人間、たとえば初期の胎児や受精卵は仲間からはずされる。と同時に、感覚や痛みを感じる動物、たとえば猿や犬などは仲間に入ることになる。もちろん、犬と人間は、脳のはたらきも身体の構造も異なっている。しかしながら、意識があつたり、痛みを感じたりするという点にかんしては仲間であると考えるのである。そして、動物の権利と福祉とを、強く主張してゆく。

「痛み主義」の基本的な感情は、「痛がっているものを殺したりいじめたりするのはかわいそう!」というものだ。だから、痛がっている猿や犬を使う動物実験には絶対反対する。あるいは、母親の子宮の中にいる胎児を中絶しようとする、胎児はいやがってもがくようにみえる。だから、そんな残酷なことをしてはならないと訴える。「痛み」を重視するこの考え方には、一定のリアリティがある。というのも、自己利益の本性のところで書いたように、「苦痛の除去」というのは、人間にとって、最優先課題のひとつだからである。

第五に、生き生きとした生命活動を行なっている生物すべてを、我々の仲間に入れてゆく考え方もありえる。人間や動物だけにとどまらず、植物や、川や、湖や、生体内で活動している組織や細胞なども仲間だと考えることもある。これは、「生命主義 vitalism」や「アニミズム」を生みだすことになる。

生命主義の考え方にたてば、地球上のすべての生命あるものは、「自己」の仲間に入ることになる。すべての生命を対象とした生命主義は、したがって、「連なりの本性」と非常に近いものになってゆく。地球上のすべての生命を対象とした「自己利益の本性」があるとするれば、それは、地球上の生命の豊かさと発展のために、地球外の資源や環境を利用すべしという考え方となって現われて

くるのだろうか。

6 連なりの本性と自己利益の本性の違い

地球上のすべての生命あるものを「自己」のグループに入れるときの「自己利益の本性」は、前回に述べた「連なりの本性」とどこが違うのか。こういう疑問が湧いてくるかもしれない。そして、「連なりの本性」とは、実は、地球規模にまで拡大された「自己利益の本性」のことなのではないかという疑いも出てくるだろう。

結論から言えば、「連なりの本性」と、地球規模にまで拡大された「自己利益の本性」は、やはり決定的に異なる。

まず、地球規模にまで拡大された「自己利益の本性」とは、地球上のすべての生命あるものを「自己」のグループに入れ、地球外の資源や環境を、自分たちの利益のために利用していかうとする本性である。そこにあるのは、地球上のすべての生命あるものと、それ以外のものを線引きして区分しようとする明確な意志である。

そのうえで、この私が、そのグループ全体の利益や、グループを構成しているひとつひとつの生命体の利益を守っていこうとする。

これに対して、「連なりの本性」というのは、地球規模に広がった「生命の母体」と自分とが一体となることを願う本性であり、自分をそこへと消し去ってしまうことを願う本性である。そこには、この自分が主体となつて、仲間たちの利益を守っていこうという決意が希薄である。そこにあるのは、むしろ、自分という個性性のはからいを捨て、生命の母体という高い価値へとみずから没入させてゆく志向性なのだ。

もちろん、貴重な森を手つかずで守ろうという「保存」の思想の背後には、あきらかに「連なりの本性」がある。しかし、「連なりの本性」が生み出しているのは、その森が尊く価値あるものであるという確信であり、そしてそれと一体化したいという願望である。外からの侵入者から森を守ろうという力強い意志は、森を自分たちの仲間とみなしたときの「自己利益の本性」か、あるいは森を自分たちの生活のための道具や財産とみなしたときの「自己利益の本性」から導き出されている可能性が高い。

このふたつの本性の差異は、微妙であるが、しかし、しっかりと区別する必要がある。

ナシヨナリズムを例にとって、さらに考えてみよう。

ナシヨナリズムをささえる本性にもまた、「自己利益の本性」と「連なりの本性」の双方がある。

まず、日本国籍をもつ人間に対して仲間意識を感じ、「自己」のグループとみなすことによって、ナシヨナリズムが成立する。これは、日本人全体にまで拡大された「自己利益の本性」に裏付けられている。この本性のもとでは、グループの内部の個々の日本人は、お互いに独立した人間同士であり、仲間であるとみなされる。ここにあるのは個性性の論理だ。

しかし同時に、日本人にまで拡大された「自己」のグループに、生命の母体への「一体化」が重ねあわされることがある。そのときには、日本人のグループに自分を溶けこませ、自分を消し去りたいという願望があらわれてくる。それは、集団への一体感に裏付けられた激しい熱狂を生み出す。それが激しくなれば、個人よりも、日本人のグループの方が価値が高いのだとみなす考え方があらわれてくることもある。「全体主義」をささえる心情の成立である。

ナシヨナリズムささえる、このふたつの筋道を、きっちりと押さえておくことが大事だ。(もちろん、ナシヨナリズムの本質が「人間の生命の本性」のみでとらえられるわけではない。そのため

には、社会学的、歴史的考察が不可欠である)。

「連なりの本性」と「自己利益の本性」は、全く異なった原理ではたらくのだが、しかし実際の場面では、ここで見たように、かなり複雑な形で共存していることが多い。生命倫理や自然保護の場面では、その結び目をときほぐすのに、とても時間がかかる。具体的な事例を用いた分析は、連載のなかでもう再度詳しく試みることにする。

「自己利益の本性」にかんしては、差別と暴力の問題がまだ残されている。次回にあらためて検討することにしたい。